30　北原千鹿　羊置物　一点
昭和四年（一九二九）　銀、鍛造
二七・〇×四六・五×二五・〇（台含む）

31　小林華光　鶏置物　一対
昭和四年（一九二九）　銀、鍛造
雄：高二六・四　雌：高二六・四

いずれの作品も昭和三年の大礼に際して貴族院より献上の品で、「羊置物」は昭和天皇へ、「鶏置物」は香淳皇后へそれぞれ献上された。制作は、貴族院より東京美術学校が依嘱を受けた。同校の校長をつとめた正木直彦の『十三松堂日記』によれば、両作品は昭和天皇の干支の丑、香淳皇后の卯から七つ目の干支（裏干支）である未と酉を表したものである。厄を払うなどの意味から干支のものを身近に置く習慣があるが、自分の干支から数えて七つ目の干支を七つ目、裏干支などと呼び、七つ目のものも合わせ持つと縁起が良いとされる。『十三松堂日記』には昭和三年五月に貴族院に対して羊と鶏の主題を提案、いずれも「銀打出置物」にすること、同年十月には羊は北原千鹿（一八八七～一九五一）、鶏は小林華光（一八八〇～一九五五）にそれぞれ制作を分担した、と記されている。北原、小林ともに東京美術学校の教職員ではないが、当時、数多くの依嘱制作を請け負っていた同校では、外部で作家として活躍していた卒業生らにも制作を分担していた。作品の完成は翌四年のことである。

「羊置物」を担当した北原千鹿は香川県生まれ。明治四十四年に東京美術学校金工科を卒業、伝統的な金工技術を学んだ北原だが、教鞭をとっていた東京府立工芸学校を大正十年に辞してからは制作に専念、新しい時代の工芸を目指す様々な活動に参加した。特に大正十四年に結成された「工芸済々会」、翌年には伝統の打破を求めて結成された「无型」、帝展に工芸部門の設置を求めた「日本工芸美術会」にも名を連ねた。工芸部門が初めて帝展へ参加した第八回では特選、翌年も連続して特選を受賞した。この昭和三年第九回帝展出品作は、やはり羊を主題とした置物で、板金を曲げてリベットで留め付けた斬新な造形で話題を呼んだ。この翌年に完成された本作は、帝展出品作とは対照的に伝統的な鍛造技法によるもので、表面に鎚目を残し柔らかな素材感をみせたところにこの作者らしさがある。北原は昭和二年には新進の作家を集め、金工の革新を目指した「工人社」を主宰し、昭和初期の工芸界に大きな影響を与えた作家であった。

また「鶏置物」を制作した小林華光は、明治三十七年に東京美術学校を卒業、その後の履歴は詳らかではない。しかし、確かな彫金技術による作品で、やはり鍛造により成形し、頭部や羽などに細かな彫金が施されている。雌雄いずれにも腹部に「華光謹作」の刻銘がある。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

花ひらく個性、作家の時代―大正・昭和初期の美術工芸
三の丸尚蔵館展覧会図録No.50

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成二十二年三月三十日発行

© 2010, The Museum of the Imperial Collections